



激闘～セミに負けない声を出せ～

7月の生徒会目標です。1学期の締めくくりとして、部活動や授業、学校生活でのあいさつや行動など、様々な場面で、セミに負けないくらいの声や気持ちを持って取り組もうという意気込みが感じ取れます。

さて、6月12日の陸上競技を皮切りに地区夏季総合体育大会が始まっています。そして、先日の土・日に多くの競技が行われました（バスケットとサッカーはまだ試合が残っています）。各競技で上位（ベスト8）に入賞したチーム、個人を紹介します。また、この他に、県大会個人戦に出場する選手（テニス；井上達哉・詫間大、真鍋実佑・竹安このみ、中林香織・田太裕子、岡田祐里佳・西坂芽生、卓球；鈴木貴子）もいます。

- 陸上男 400mリレー4位、1年100m2位:稲田誠巳、3年100m5位:尾崎文哉、200m4位:尾崎文哉
400m1位:佐藤大城、1年1500m8位:真鍋海星、三段跳4位:舟木貴俊
- 陸上女 400mリレー4位、低学年400mリレー6位、2年100m3位:安藤朱音、3年100m2位:宮崎葵
走高跳4位:宮崎葵、棒高跳3位:湊園美・6位:大西侑希、砲丸投3位:松岡由希・7位:安藤美愛祈
- テニス 女子団体3位、女子個人戦ベスト8:中野加恵・渡辺愛華
- 剣道 男子団体5位、女子団体準優勝、男子個人戦準優勝:則包貴哉、女子個人戦3位:峰久真琴
- バレー 男子準優勝、女子3位

スポーツの試合では、より多くの得点やいい記録を出した方が「勝ち」になります。しかし、技や力だけでは勝てません。ピンチになってもあわてない、苦しくても逃げない、強い精神力も必要になってきます。その気持ちを奮い立たせるのが「声」です。持てる力を振り絞るエネルギーとして、チームの心を一つにするパワーとして、大きな武器になります。「記録」は負けても、元気さやチームワークは絶対に負けないチームであってほしいと思います。それが「記憶」となって、人々の心を打つことだってあるのです。

人々の心に決めたゴール

2010年に自分は何をしていたらだろうか。ずっと後になって思い出そうとすると、多くの人がサッカーのワールドカップ決勝トーナメントの、6月29日のゲームを手がかりにするかも知れない。「あれは、日本がパラグアイと死闘を演じた年だった」というふうに。

日本代表はパラグアイにPK戦の末敗れた。初の8強の夢はついでた。しかし、南米の試合巧者とぎりぎりまで競い合い、堅守を維持しつつも攻めの姿勢を貫いた。激しくひたむきに、選手たちは持てる力を振り絞った。ままたらぬ就職活動、リストラの嵐がおさまらない企業社会……。出口が見えない状況に社会が迷い込んでいる今、死力を尽くす選手の姿は、深く人々の心に刻まれたのではないかな。

あと一步だった。選手や岡田監督らには無念の思いがあるだろう。だが、敗戦なのに、すがすがしささえ残る闘いぶりだった。快進撃に日本中が熱狂していった。ワールドカップ直前の強化試合で4連敗し、日本代表は土壇場に追い込まれていたから、なおさらだった。

選手に声援を送る人々の胸の中にあっただのは、劣勢の中でも自らを信じ闘い続けてきた選手たちへの深い共感だろう。年齢や性別を超えて、ここまで日本中が一体感を感じるような出来事は久しくなかった。

岡田監督は昨年、日本外国特派員協会での記者会見でこう話した。「南アでの結果によっては、恐らくいろいろな影響が出る。成功すれば日本も自信を持つだろうし、失敗すれば景気が悪くなるかも知れない」。

監督は「4強」を掲げ、「世界を驚かす」と言った。途方もない目標だと誰もが思った。選手でさえ、現実の目標として4強を思い描こうとした者は当初、数人だったという。

だが、設定したハードルが高かったからこそ、選手は自らを極限まで追い込めたのだ。パラグアイ戦後の大久保選手の言葉が印象的だ。「限界はないんだって思った」。息苦しい時代がスポーツに求めるものを、選手たちは確かに届けた。人々の心のゴールに見事なシュートを決めた。 ※朝日新聞社から抜粋

お願い＆お知らせ

- ◆ 7月16日(金)、1学期末PTA懇談会です。その際、航空写真の追加申し込みを受け付けますので、希望者は事務室へ提出ください。また、1学期の学校評価アンケートにもご協力ください。
- ◆ 8月1日(日)、「詫間ゆめ街道クリーン作戦」があります。昨年も実施されていましたが、今年から小中学校PTA共催の行事となりました。ボランティアとして多くの方の参加をお願いします。
- ◆ 9月26日(日)、PTA研修視察で高知方面へ行く予定です。坂本龍馬記念館や日曜市などを見学し、PTAのより一層の親睦を深めたいと思います。詳細については、9月1日に改めてご案内します。